様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　６ 年 １０ 月 １０ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A)）
研究期間：2022～2023
課題番号：２２ＫＫ０２０２

研究課題名（和文）欧州における重層的保健協力の諸相と民間アクターの役割

研究課題名（英文）Regional Health Cooperation in Multi-Layered Health Governance: A Comparative Study of Pandemic Preparedness and Response Efforts in the EU and Asia

研究代表者
詫摩　佳代（Takuma, Kayo）

東京都立大学・法学政治学研究科・教授

研究者番号：７０５８３７３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,800,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究の主な主張の一つは、地政学的な動向の影響によりグローバルな協力 が難しくなる中、地域間や同志国間などのサブレベルでの協力がますます重要になってきているということだ。政治的緊張が高まりを受けて、戦後のリベラルな国際秩序の基盤をなしてきた多国間主義は変容を余儀なくされていおり、共通の価値観を共有するより小さな単位で特定の問題に取り組む動き(ミニラテラリズム)が近年盛んだ。ただし、ミニラテラリズムではグローバルイシューとしての感染症の問題を解決 するのは限界がある。本研究ではイノベーションという観点から、サブレベルの取り組みとグローバルな取り組みをいかに連携させるかということを検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究はパンデミック中の保健ガバナンスの変容をワクチン外交や各国の保健外交から分析したものであり、ガバナンスが地政学的な影響を受けて、組織的イノベーションが進行したことを論じている。現在進行形の動きを分析したものであり、学術的な意義はもちろん、世界的なパンデミック予防と対応への政策的インプリケーションも大きいと予想される。

研究成果の概要（英文）：One of the main arguments of this study is that as global cooperation becomes more difficult due to the influence of geopolitical trends, cooperation at sub-levels such as between regions and like-minded countries is becoming increasingly important. Multilateralism, which has formed the basis of the postwar liberal international order, is being forced to undergo a transformation as ideological divisions and political tensions increase. In recent years, a movement to tackle specific problems in smaller units (minilateralism) has flourished. However, minilateralism has its limits in solving the problem of infectious diseases as a global issue. In this study, I examined how to link sub-level efforts and global efforts from the perspective of innovation.

研究分野：国際政治

キーワード：グローバル保健ガバナンス　多国間主義　ミニラテラリズム　地域内保健協力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

グローバル保健ガバナンスとは、人間の健康に関する諸課題に、多様なアクターが様々な方法を用いて取り組む体系のことを指す。他方、近年では国際社会の分断や国際機関への信頼低下により、このような体系の綻びが観察されており、新型コロナ禍ではそのような動きが一層、進んだと言える。その一方で、著しい相互依存の網の中にいる我々にとって、 他者と協力する必要性自体は衰えていない。ただし、各々にとっての「他者」の意味するところが不特定の他者ではなく、価値を共有する同志に限定されつつある。実際、コロナ禍では地域ベース、二国間 ベース、有志国間ベースでの実質的な保健協力が活発化してきた。

２．研究の目的

本研究は、保健の分野においてこうしたミニ・ラテラリズムの動きが起きているということを指摘するわけだが、より根本的な問いとしては、そのような現状と保健分野における多国間主義の要請を、どのように擦り合わせていくべきか、という点である。保健の問題は上述の通り、効果的に管理していく上で、他者との協力が不可欠だ。とりわけ、近年において、多くの感染症が中国をはじめとするアジアで発生している事実を踏まえれば、特定国を排除した国際協力は無意味というより他ないだろう。そのようなことを踏まえれば、何らかの形で、多国間協力を温存する道を探らねばならないのである。ミニ・ラテラリズムが進行する現状と、こうしたテクニカルな要請の折り合いをいかにつけていくのか、という点こそが、本研究における重要な関心事項である。

３．研究の方法

公開されている一次資料、二次文献、関係者へのインタビューによる。

４．研究成果

（１）出版物：本研究を通じて作成した二つの論文の概要を説明する。

A）Wen-Hua Kuo and Kayo Takuma, “‘Glocal’ Health Governance: Organizational Innovations in the Era of Covid-19 “(2025 年刊行予定の論文集に収録予定)

共同研究者の台湾・國立陽明交通大学の Wen-hua Kuo とともに、共著論文を執筆した。2025 年に観光予定の論文集に収録予定である。

本論文はパンデミック中の保健ガバナンスの変容をワクチン外交や各国の保健外交から分析したものであり、ガバナンスが地政学的な影響を受けて、組織的イノベーションが進行したと論じている。

B）Kayo Takuma, “Multilayered Health Governance: How to prepare for the next pandemic in an increasingly divided international society?”, Final Report to the EHESS, (2024 年夏、EHESS ウェブサイト上に公表予定)

受け入れ研究機関に 2024 年 3 月に提出した研究報告書である。その後、匿名の査読をうけ、現在、改訂中であり、2024 年 7 月に EHESS のウェブサイトに掲載予定である。

地政学的な対立の煽りを受けて、グローバルなレベルでの意思決定がますます難しくなる国際情勢の中で、地域や有志国間の保健協力がパンデミック以降、各地で進展してきた。この傾向が進めば、国際社会の分断が促され、世界規模でうまく対応できない危険性をはらむ。このような中で、イノベーションが鍵だと論じた。つまり、異なるレベル（グローバルー地域、地域ー地域など）を結ぶイノヴェイティブな取り組みが数多く出現しており、こうした取り組みをうまく機能させて行くことが今後の保健ガバナンスにおいて重要になってくると論じた。

（２）研究成果の概要

I. 保健分野の多国間主義

グローバルなレベルで感染症に備え、対処するための制度枠組みは、パンデミック下でさまざまな問題点を露呈し、それを修正・補強しようという動きが目下、進められてきたが、地政学的な動向の影響もあり、そこには多くの壁が立ちはだかる。

2024 年 5 月時点、IHR 改定並びにパンデミック条約策定をめぐる交渉が行われているが、それは決してスムーズではない。それでもなお、グローバルなレベルでの協力の枠組みは重要であることに変わりはない。国際社会の中で、中心軸となる規範やルールを整備し、提供する役割が期待されるからだ。たとえば、ハイデラバード大学の Ranjit Kumar Dehury は、パンデミック対応における WHO の役割を批判的に論じながらも、今後のグローバルなレベルでの健康安全保障における WHO の継続的な役割の必要性を論じている（Ranjit Kumar Dehury, “Relevance of the world health organization in a multipolar world in solving global health challenges”, *Front Public Health*, 2022)。ただし、昔と違って、地政学的な動向が直接的に保健分野の多国間主義に影響を与えるようになった今、その取り組みには、今までにはない工夫が必要となってくる。

II. 重層化する保健ガバナンス

COVID-19 パンデミックの最中には、国レベルでの対応強化はもちろん、各地域で、近隣諸国

との連携強化や、連携強化のための新たな枠組み設置の動きが多数見られた。また地域を超えて、友好国の間で、パンデミック対応の枠組みが見直されたり、新たに枠組みが設立されるという動きも見られた。

他方、各々のグループや地域が実質的な協力を進展させれば、自ずと地域間、あるいはグループ間の格差が生じる。とりわけアフリカ地域の医薬品製造能力強化やサーベイランスの強化には、域外国や企業、財団等の積極的な財政・技術支援が不可欠であり、各国とりわけ先進国の積極的な支援や支援に向けた仲介が求められる。

アジアに関してもパンデミック下で、さまざまなイノベイティブな取り組みが出現している。現状では、地域内の政治的な緊張を反映して、各取り組みが有機的に結合しているとは言い難い状況である。それでも、医薬品のアクセス格差解消など、特定の項目に焦点を当てれば、地域のエコシステム構築に向けて、この間に出現した様々な取り組みを有機的に繋げていき、またそれをグローバルや他地域の取り組みとも有機的に繋げていける可能性―例えば、日米やクワッド、日本―東南アジア諸国の既存の協力枠組みを、中南米を視野に入れたより広域的な地域に拡大していくなどーはある。そのためにはイノベイティブな視点も重要だ。

Ⅲ．イノベーションの現状と可能性

本研究では WHO アカデミーや韓国の生物製造訓練ハブなど、パンデミック下では見られた様々なイノベーションのうち、国家が政治的なイニシティブを取りつつも、多様なアクターの協力のもと成り立っている新たな取り組みを紹介する。いずれも、ドイツやフランス、韓国といった国家の政治的主導力がなければ実現しなかったものであるが、その一方、実際の運営には国内外の多様なアクターに参加の道を開き、感染症の予防と備えを総合的に強化しようという取り組みである点は注目に値する。

ただ、いずれの取り組みもまだ着手から日が浅く、客観的な評価にはまだ時間がかかる。本研究で紹介したイノベーションが、今後うまく運用されるか否かはいくつかの要素にかかっていると言える。第一は、これらの枠組みに参加する多様なアクターを、世界的なサーベイランスの改善や、医薬品のアクセス格差の解消といった個々の目的に向けて、きちんと連携させることができるのか、第二は地政学的な対立の行方である。近年の保健ガバナンスは地政学的な対立を受けて、とりわけグローバルなレベルでの協力や合意形成が困難を極める局面が増えている。そのようななかで、政治的リーダーシップに支えられた取り組みは、実質的に世界の感染症に対する備えと対応能力を強化する上で頼もしい側面がある。ただし、そのような可能性と、グローバルイシューとして感染症対策をどのように擦り合わせていくのかが今後の大きなチャレンジとしてのしかかる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ルシュバリエ　セバスチャン (Lechevalier Sebastien)	社会科学高等研究院・FFJ・教授	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
その他の研究協力者	郭　文華 (Kuo Wen-ha)	國立陽明交通大学・Institute of Science, Technology and Society	
その他の研究協力者	ティベルギアン　イブ (Tiberghien Yves)	ブリティッシュコロンビア大学・Department of Political Science	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

フランス	社会科学高等研究院			